神々の黄昏

天魔の担い手

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
神々の黄昏

【Ｎコード】
Ｎ１６５５Ｚ

【作者名】
天魔の担い手

【あらすじ】
人間のことが信じられなくなった主人公フェルナが、妹・ミミと出会い、
旅を続けていくうちにまた人を信じられるようになっていく物語です。
初めての作品なのでかなり言葉などが変かもしれませんが、一度読んでみてください。（冒険・恋愛系です）

邂逅

「貴様などくずでしかない。ここから出て行け！」
そう言われて早１０年。捨てられたとき、少年は捨てた人へ復讐を誓ったのであった。
　ある商業都市の市場、あの少年はそこにいた。名前はフェルナ。顔も知らぬ親がつけた名前だ。
彼は今、新たな旅に出る用意をしていた。捨てられた日から彼は１０年間、１人で旅をしてきた。
その間に炊事などのことを覚えたが、孤独ということも覚えた。もう捨てられるのは嫌だ。なら捨てられないようにするにはどうすればいい？
答えは簡単だ。誰とも触れ合わなければいい。触れ合わなければ捨てられることも無い。
だがこの後、フェルナの考えは変わることとなる。
　出発を明日へと控えた夜、彼は宿にいた。この都市には一ヶ月くらいいたのですこし名残惜しい。明日に控え、寝る前に部屋を見渡した。１０年前に、旅を始めた頃に拾った剣。身体能力を上げるという不思議な能力を持っている。が、使ったのは１回で真偽は判らない。剣と食料があるのを確認し、寝ようとした瞬間・・・
「太陽に焼き尽くされろ！プロミネンス」
とかいう言葉が聞こえてきたので、慌てて剣を取り、大きく飛躍し天井を突き破って外に出た。
すると自分の居た部屋が焼き尽くされてしまった。
「どういうことだ？」
と思っていると前方に大鎌を持った人が現れてフェルナに攻撃してきた。フェルナは攻撃を剣で受け流しながら首に手刀をいれた。すると謎の男は気絶して落ちていった。フェルナも地上に降り立った。すると周りから武器を持った人達がフェルナを包囲した。そして、

「フェルナ！！おとなしく我等に捕まれ」
と言って来たのでフェルナは、
「知らねえ奴等に捕まる理由がどこにある？理由を教えろ」
と言い返した。謎の人達は
「姫様がお前に会いたいそうだ」
「却下、つか姫なんて知らねえし」
とフェルナは答え、それから
「邪魔するなら容赦はしないぞ」
と言い放って、走った。剣を振り、謎の人達を倒していき、最後の
一人を倒そうと思った瞬間、
「雷に砕かれろ！！サンダーブラスト」
と頭上から聞こえてきたので、すぐさまそこからどくと雷が落ち、
地面を燃やしていた。
「あ・危ねー。誰だ？こんなことするのは」
と聞くと上から美少女が下りてきた。
「久しぶりね、フェルナ。ずっと会いたかったわ」
とか言ってきたのでたまらず
「誰だ？俺はお前なんか知らねえぞ」
といってしまった。するとその美少女は悲しい顔をして
「ひどいわフェルナ。私を忘れるなんて」
「いや、その前に本当に知らねんだよ」
美少女はいつの間にか流していた涙をぬぐい、そして
「私の名前はミミ、ミミ・センチェル」
と名前を明かした。それで思い出したのかフェルナが、
「センチェルってセンチェル王国の・・・」
といってそして、
「あの馬鹿みたいな戦争のど真ん中にいた少女か？」
と聞いた。するとミミは、
「そうよ。あなたが助けた少女よ」

８年前・・・
フェルナはある砂漠を歩いていた。この砂漠はそこまで暑くはない。ずっと当ても無く歩いていると、目の前に国が見えてきた。
　センチェル王国、国土も広く豊かな国であることで知られている。その国にフェルナは立ち寄った。賑やかで人も活気にあふれていたが、
「逆にここまで来ると不気味だな・・・」
とフェルナは思った。まぁどうでもいいかと思い、近くの宿屋へ行こうとしたとき
ドカーーーーン
と爆発音がした。その方向をみると王宮が燃えていた。急いでいってみると王宮は見る影も無くなっていた。近くでは他国と戦っている王国軍がいた。
「王はもう死んでそうだな・・。じゃあさっさとこの国を出るか・・・」
ふと王宮の方を見ると、少女が立っていた。それも燃え盛る火の中に・・・。そこに王宮の塔が落ちてきそうになった。
「はやくそこをどけ！」
と叫んでも少女は答えない。仕方なくフェルナは腰にある剣を抜き、走った。それも信じられないスピードで・・・。一気に少女のところまで行き、少女を抱きかかえた。そしてそのまま高く跳躍し、もといた場所へ戻った
「大丈夫か？」
と聞くと少女は
「大丈夫、助けてくれてありがとう。」
といいそして
「私はミミ、あなたは？」
と聞いてきた。けれどフェルナはすぐには答えられなかった。自分に名前を名乗る資格など無いと思っていたから。だが、
「フェルナだ」

とだけ答え、センチェル王国を去った・・・。

「って、８年も前のことをよく覚えていたな」
と感心していると、ミミは
「当然よ、あなたは私の恩人なのだから」
と言ってきた。
「それに、私の唯一の・・・」
とそこでまた爆発音が起きた。すると上から誰かが下りてきた。
「報告します。古代兵士（アンティークソルジャー）が暴れている模様です」
「なに！また最悪のタイミングで・・・」
と何かよく分からないので
「おい何なんだよ？その何とかってのは」
と聞いてみた。
「古代兵士はその名の通り、古代の機械兵士です」
と報告をした人が答えてくれた。さらに
「魔法が効かないという最悪の鎧を身に着けているわ」
とミミが捕捉してくれた。
「じゃあ剣は効くんだな？」
「ええ、効くわよ。けど・・・」
とそこまでしか伝わらなかった。フェルナはもうあの化け物のところへ行ってしまっていた。
「いいのですか、ミミ様？古代兵士を一体無駄にして」
と側近が聞いてきた。
「ええ、いいのです。彼の今の実力を知るためです。憎しみに満ち溢れた彼の力を・・・」
　フェルナは古代兵士の前まできた。
「へぇー意外とでかいな・・・」
と一言いうと古代兵士に一太刀いれた。するとギィィンという金属音が響いた。
「うわっ硬いなこれは・・・」

感心していると古代兵士が攻撃をしてきた。それを難なくとめた。
そして
「反撃だ！悪魔の剣（デーモンソード）！！」
と古代兵士に攻撃した。すると
ズカーーーーーーン
と綺麗に粉砕した。跡形もなく・・・
「一丁あがり。さて戻るか」
フェルナはミミ達がいるところへ戻っていった。

「一応倒してきたが・・・」
と一度言葉を切り、そして
「なぜ俺を試した？なぜ試す必要があった？」
と聞いた。するとミミは
「あなたがどれだけの力を持っているか、私たちの指令官になりうるか、それを知るためよ」
と答えた。それにフェルナは何も言わなかった。
「まぁそれは置いといて、古代兵士をどうやって動かしているんだ？」
「遠隔操作よ。今の最新技術によって機械の頭脳を操ることができるわ」
「じゃあ中には誰も乗っていないのか？」
「ええ、だから細かい操作はできないの」
するとフェルナは少し黙り込み、そして
「中へ入ってもいいか？」
と言った。ミミたちは驚き、
「私たちでさえ開くのが無理なのにあなたにできると、そう言うの？」
「ああ、俺にはできる、必ずな」
一行は、古代兵士の収納してある倉庫へ着いた。そこには数十体の古代兵士がそびえていた。

「よくこんなに集めたな。」
「私たちの本拠地にたくさん埋まっているのよ」
そこでフェルナは少し驚いた。
「そこは、ラズーナという土地か？」
「ええ、そうよ。でもなんで知っているの？」
「それは知らなくていいことだ」
と言って一体の古代兵士に近付いた。
「今から開くからちょっと離れていろ」
といい、何かの呪文を詠みだした。
「我は古の秩序を守り語り継ぐ者。今、我と契約を交わし、我を信じ、我に従え。ユーロス・バイト」
すると、古代兵士が動き、
「お前と契約を交わそう。フェルナ・センチェル」
といい、後ろのハッチが開き、ロープが落ちてきた。それに捕まり、上ろうとしたそのとき、ミミの側近、ベータが
「センチェルって、ミミ様と同じ名字！！」
と叫んだ。それにフェルナは面倒くさそうに
「おなじ名字なだけのことで、ミミとは何の関わりもない」
といって、古代兵士に乗った。中は機械で溢れていた。
「あれと大差は無いか、ならば・・・」
フェルナは、小声でしかしそれでいてよく響く声で
「契約者フェルナが命じる、我が命に応え起動せよ」
といった。すると全ての機械が起動した。
「契約者よ、そなたの命に応えよう。」
その後、コックピットが出てきた。それにフェルナは座り、動かした。すると古代兵士は動いた。力強く、しかし繊細に動いた。
「この古代兵士は俺と契約しちまったから、他のと契約してくれ」
と下にいるミミたちに言った。不思議とミミたちからは何も言ってこなかった。
「皆、乗らねえのか？」

と聞いてみた。答えはすぐ返ってきた。
「神虫が大群で襲ってきているんだ。」
「マジか？」
神虫とは昔、神に仕えていた最強の虫。その強さは古代兵士に勝らず劣らずといった感じだ。それが大群となると・・・
「街が大変になるぞ」
「そうだ。だから街に入る前に撃退しなければならないんだ。」
「だが、こいつらだけじゃ無理だ」
「そこであなたに手伝って欲しいの」
とミミが話しに割り込んできた。
「別に頼まれなくても手伝うが、どうやって？」
「あなたの持っている魔剣紅月の力で」
「それが俺の剣の銘か？」
「そう、血を好む最悪の古代武器（アンティークファクト）。その真の姿は誰も知らない」
「原型じゃないのかこれは」
「ええ、それは〔伝説の剣〕身体能力を上げる剣で」
「あとは悪魔の剣だろ？」
「そうよ、よく知っているわね」
「古文書に書いてあったからな。ついでに、神虫撃退の剣は火炎の剣（ソード）、すべてを燃やし、灰にする業火の剣（インフェルノ）」
と説明したところで大きい衝撃がきた。
「もうすぐそこまで来ているようね。フェルナ、お願いね」
「任せておけ、但し最低限の援護は頼む」
「当たり前じゃない」
ミミがそう答えるとフェルナはフッと笑い、倉庫を飛び出した。
フェルナたちが居る街のはるか上空にある人物が居た。
「さて、どれだけ強くなったか、お手並み拝見といこうか」
　フェルナは神虫の真ん中に入り込み、紅月でなぎ払った。するとその周りの1～2匹は死んだが、それ以外は傷1つ付かなかった。
「さすがに普通の状態では無理か、ならば・・・」

と、紅月を天に掲げた。すると紅月は炎を纏い、刀身も紅くなった。
「これが火炎の剣か。では1発目、そ～れ」
と、神虫に向かって火炎の剣を振った。すると、斬撃は炎を纏い、神虫を襲った。神虫は爆発した。しかし、これもまた1～2匹くらいしか死ななかった。これを見て、さすがのフェルナも驚きを隠せなかった。ここから神虫の逆襲が始まった。
　街の中で用意をしていたミミはそわそわして落ち着きがなかった。そこに1人の部下が報告に来た。
「ミミ様、古代兵士の用意が完了しました。あとはミミ様の号令1つで動けます」
ミミは、その報告を聞き終わるとすぐに
「全員、出撃！目標は街の外周部にいる神虫！！」
と号令をかけた。古代兵士は全部出撃した。ミミも自分の古代武器を持って、向かった。
愛する者のいる、地獄のような最悪の戦場へと。
　神虫は自分の頭上に炎の弾をつくり、それをフェルナへと放った。それをフェルナは2～3発は避けたが、残りは避けきれず、直撃してしまった。
「くそっ、これはかなりやばいな」
すると次は上から何か触手みたいなのが降ってきて、フェルナを捕まえて、拘束した。
それがまるで的のように神虫たちはまた炎弾をつくってフェルナに放った。
フェルナは為す術なく炎弾をもろに喰らい、倒れてしまった。

　ミミはフェルナが倒れたところを見て、涙を流していた。
今はそんな場合じゃないと分かっていながらも泣かずにはいられなかった。
しかし、すぐに悲しみは怒りへと変わった。
「絶対に、絶対に許さない。消えてしまえ！！」

ミミはそう叫ぶと魔力を開放し、渾身の『プロミネンス』を数発、神虫に放った。
しかし、くらうはずもなく、神虫たちを怒らしただけだった。

フェルナは考えていた。このまま死ぬか、それとも生きるか。
（もう死んでもいいか。俺の存在意義なんて無いに等しいからな）
そう考え、永遠の眠りにつこうとしたとき、どこからか声がした。
「そうかしら。少なくとも私はそうは思わないわ」
「誰だ！」
「私はあなたが忘れた存在。名を・・・・」
そこでフェルナは何か思い出した。この、魔剣『紅月』を見つけたときのことを・・・
それは、7年前のこと・・・・。

紅月

「暑いなー。」
フェルナはある砂漠を歩いていた。目指す場所はある遺跡、伝説の剣が眠る遺跡。
しかし・・・
「本当にあんのか？無かったらアイツをぶっ飛ばす」
実はその遺跡の情報は前に立ち寄った町にいたチンピラ達から聞いたのだ。
だから信憑性はあまり無い。
が、今現在行く当ての無いフェルナは興味本位で行ってみることにしたのだ。こんな暑い砂漠の中を・・・。
数時間後、フェルナは遺跡にたどり着いた。
「ここが遺跡か」
その遺跡は地下に続いていた。階段があり、一寸先は闇だった。
それでもフェルナはどんどん降りていった。
　ある程度降りると、何も無い大きな広間に出た。普通の人が見たらそう思うだろう。
だが、フェルナには見えた。そこにいる、巨像が。
「なんだ、これは？」
フェルナはその巨像に近づくと、どこからか声がした。
「あなたは誰？」
それは女の子の声だった。しかし女の子特有のか弱い声ではなかった。
「俺はここに剣があると聞いて来たんだ。」
そうフェルナが言うと、彼女（？）は
「そうあなたも私を求めてきたのね」
と答えた。
「なら、私の所有者となりうるか、ここで証明してみなさい」

「どうやってだ？」
すると近くで物音が聞こえた。
「簡単よ。前にあるゴーレムを倒して。それが第一段階よ」
「ゴーレム？」
そう言ってからフェルナは危険を感じてそこから飛び退いた。
「なんだ、今のは？」
土埃が晴れるのを待ってから見ると、さっきまでフェルナが立っていた場所は陥没していた。よく目を凝らして見てみると、さっきまでただの巨像だったのが動いていた。
「どういうことだ、なぜ動く？」
「そのゴーレムはわたしの『血』が入っているのよ。だから私の言うとおりに動くの」
「血だと？」
フェルナはゴーレムが攻撃してきたので、それをよけながらさっき彼女が言っていた言葉の意味を考えていた。
（『血』ということは液体・・・・・・ならば！！）
フェルナは右手を前に突き出し、呪文の詠唱を始めた。
「水の精霊・セイレーンよ、敵を狂わす呪いの歌を歌いたまえ！」
詠唱が終わると、右手に魔法陣が浮かんでおり、そこから呪詛のようなものが出ていた。
その呪詛はゴーレムに取り付くと、光を放ち、代わりにゴーレムがきしみだした。
謎の少女（？）は驚いたような口振りでフェルナに問うた。
「あなた今何をしたの？」
「な～に、精霊の力を使って液体を操ったのさ」
「私の『血』を操った？そんなことが・・・」
ゴーレムは盛大な音とともに崩れ去った。
「さあ、次はなんだ？」
フェルナは不敵な笑みを浮かべながらそう言った。
「・・・この奥にある階段を下りて」

フェルナは指示に従い、奥にあった階段を下りた。そこはさっきの広間よりも広いところに出た。
「来たが、どうするんだ？」
フェルナが聞くと地面が揺れた。
「次は耐えてみなさい、この聖槍を！！」
その声とともにフェルナの正面１００ｍ先に光が集まりだした。
「ルールは簡単。あなたの後ろにある石像を壊さなれなかったらクリアよ」
フェルナは歯ぎしりした。なぜならフェルナは防御の魔法を一つしか知らないのだ。しかもそれも成功率は５０％と明らかに賭けなのだ。
（まぁ、やらないよりはマシか）
とフェルナは禁忌防御魔方陣を展開した。
「発動・ミストルテインの槍！！」
収束した光は一直線にフェルナへと放たれた。
「天盾（イージス）展開！！」
フェルナの前に大きな魔法陣が展開された。ミストルテインの槍はイージスにあたり、一瞬で消え去った。
「そんな・・・なぜ建世の魔法を使えるの！！」
謎の少女は声を荒げて叫んだ。
「建世？なんだそれは」
「！・・・知らないで使ったの。神の魔法を・・・」
「神の魔法！？これが？そんなわけない。これは・・・」
そこでフェルナは少し口をつぐみ、
「・・・あいつが教えた魔法だ」
と言った。
「もちろん、そいつは人間だ」
「・・・・・・」
謎の少女は少し黙り、そして
「まあいいわ、第二段階クリアよ。次が最後よ」

そう言うと真ん中に光が集まり、人が現れた。紅い輝きを放つ剣を持って。
「彼は私の最初の保有者よ」
その声は剣から放たれた。
「そうか、こいつを倒せと？」
「そうよ。で、武器はどうする？剣を貸しましょうか？」
「心配いらない。ちゃんと持っている」
そう言うとフェルナは手に魔力を集中させ、呪文を詠唱した。
「全てを燃やす炎よ、その形を敵を薙ぐ剣に変えよ」
フェルナの手に炎が灯り、それは
「気刃・豪炎」
という言葉とともに剣となった。まるで神が持つ断罪の剣のようだった。
「魔剣か、面白いわね」
紅い剣はくっくっくと笑い声をあげた。
「じゃあ準備も整ったようだし、始めましょうか」
「ああ、そうだな」
そう言って二人は構えて、そして駆け出した。
剣を交えた瞬間、特有のキィイーンという金属音は無く、その代わりに凄まじい衝撃波が生まれ、広間が崩れかけた。
そこから紅き剣を持つ剣士は一度剣を引き、身をかがめると紅い剣は姿を変え、剣士を加速させた。フェルナは突然のことに驚いたが、すぐに状況を判断し、剣を地面に突き立てた。
すると突き立てた地面を中心にフェルナの周りに炎が守るように生まれた。これにはさすがに近づけず、間合いをとった。
もう一度間合いを詰めようと、フェルナは突き立てていた剣を引き抜き、駆け出した。その瞬間だった。
突如として床が崩れ、その崩れたところから全ての者を震え上がらせる獣の雄叫びが聞こえた。
「なんだ今のは？」

「そんな・・・アイツが目覚めてしまった」
紅い剣も剣士も震えていた。
「アイツってなんだ？」
「下にいるのは、１００年前に私達が封印した化け物、罪罰龍。アイツが目覚めたらこの辺周辺は焼け野原と化すわ」
「そんなに強いのか？その罪罰龍っていうのは」
「強いってレベルじゃないわあれは・・・ってどこいくの！？」
フェルナは紅い剣の言葉を最後まで聞かず、床が崩れてできた穴から下に落ちていった。
「かなうわけないのに」
そう言いながらも剣と剣士は下に行こうとしていた。というか
「私達がいかないと封印できないでしょっ！」
そして彼らは下に落ちていった。
フェルナが下についた瞬間、罪罰龍と目があった。その目は弱者を見下す王者の目だった。
フェルナは先制攻撃を仕掛けるため、気刃・豪炎を大きく振りかぶり、罪罰龍目掛けて斬撃を飛ばした。
しかしそれは罪罰龍に届く前に消失した。体勢を崩したフェルナは罪罰龍の反撃のブレスをくらいそうになったが、フェルナはイージスを展開し体勢を立て直した。
そこに上から落ちてきた剣士と剣がやってきた。
「アイツには魔法が効かないわ。剣で斬るしか方法がないの」
そう言って剣士は大きく跳躍し、罪罰龍に斬りかかった。
罪罰龍はそれを見て大きく息を吸い、さっきとは違うブレスを吐き出した。
それを剣士は斬り裂き、剣を目に刺そうとしたが罪罰龍は羽を広げ、それをよけた。
そこで剣士は剣を持ち直し、もう一度跳躍して腹を斬った。しかし傷は思ったより浅く、ただ罪罰龍を怒らせただけだった。
「全然駄目じゃないか。剣まで効いてねえぞ」

「昔より硬くなってる・・・これじゃもう・・・」
「なあ魔法が効かないっていうのは、魔力が効かないってことだよな？」
フェルナな意味不明なことを聞いた。
「そうだけど何を今更？」
それを確認してからフェルナは魔力を解放した。いや正確には自分の中に流れる『血』を解放した。
「あなた何をしているの？魔力は効かないって」
「魔力じゃなきゃいいんだろ、じゃあ本物の炎を使うまでだ！！」
解放していた『血』は体の中で炎と化し、フェルナの体を燃やした。炎はどんどん勢力を増し、しまいには直径１０ｍほどの炎球となった。
「何、これ？魔力じゃない・・・もしかして」
「その予想は合ってると思うぞ。」
剣士がそちらを見ると、炎球にひびが入っていた。そして炎球は破裂した。
その中には紅蓮の双翼と鎧を纏ったフェルナが出てきた。
「俺の血には不死鳥の血が流れている。そしてこの力は・・・」
そこでフェルナは姿勢を低くし、羽に魔法陣を展開しそして
「何ものにも消せぬ神の炎だ！！」
と掛け声とともに罪罰龍に向かって行った。罪罰龍はそれに気づいたがすでに遅く、フェルナは罪罰龍の腹に炎を灯した拳で殴った。罪罰龍は呻いたがそれは一瞬のことですぐに自らの頭上に２つの魔法陣を展開した。
「水と炎の複合魔法か！！」
複合魔法とは、２つ以上の魔法陣を重ね、より強力にする魔法である。
それを見破ったフェルナは虚空に円を書いた。円はフェルナを守る炎の盾となった。
「グアアアアァァァーーーーーーー」

という咆哮で魔法は放たれた。しかしそれはフェルナによって展開された炎の盾によって消滅した。
次にフェルナは大きな炎球をつくり罪罰龍に撃った。炎球は当たったが罪罰龍には傷一つつかなかった。
罪罰龍な大きくいきを吸い、フェルナにブレスを撃ってくるのかと思ったらフェルナではなく、剣士たちに向かってうった。剣士はけんを構えていなかった。このままでは直撃するのは必須。それをフェルナは見ていられなかった。フェルナは自分に加速魔法をかけ、一瞬で剣士の前に立ち、ブレスを右手に溜めた炎で消滅させた。
「なぜ助けたの？」
そう聞いてきたのは紅い剣だった。それにフェルナは目を細め、そして
「おれはな、人を信じられない。だから剣を手に入れるのはやめにしてあんたたちを助ける」
といった。それに紅い剣はなぜか怒ったような口調で言ってきた。
「じゃあなんで人を信じられないあなたが私達を救うわけ？」
「おれはもう一度人がおれを信じさせてくれるその日まで、人を助けようと決めたんだよ。
　だって多いほうが確率が高いだろ？」
フェルナはそう言った。それに紅い剣は
「なら私を信じて」
と言ってきた。それにフェルナは言い返した。
「は？だからおれは人を信じない。人はすぐ裏切り、そして捨てる。それもついさっき会ったばっかのや　つを信じられるか」
「だから私があなたに人は信じられるのだということを教えてあげる。私は絶対裏切らない。」
「・・・・・・」
「それでも信じられないのならこれを使って私を破壊しなさい」
とけんしがフェルナに小さな水晶玉を差し出した。
「・・・本当にお前は裏切らないんだな？」

「ええ、絶対に」
紅い剣が力強く首肯するとフェルナはついにおれた。
「わかった、信じよう。お前に希望をかけてみるよ」
とフェルナは剣士から剣を貰い受けた。剣士は手から剣が離れたとたん砂になって崩れ去った。フェルナは一礼し、罪罰龍に向かい合った。
「さて、やるか。でどうすれば封印できるんだ？」
「あいつの額に封印の剣をさして」
と言って、紅い剣は姿を変えた。
「額で合ってんのか？」
「わからない。昔は額にさして封印したけど今は・・・」
「そうか」
フェルナは剣を構え、剣に炎を宿した。そして双翼に加速魔法を付与した。
「じゃあ行くぜ！！」
フェルナは一瞬で最高速度（マックススピード）になって、ただ一点罪罰龍の額を目指した。
罪罰龍は羽をはためかせ、乱気流を作り出した。フェルナはそれを剣で斬り裂き、罪罰龍の顔の前までたどり着いた。
そこで罪罰龍は自らの周りに小さな光球を出し、それはフェルナを襲った。反応が遅れたフェルナは、直撃を食らったようにみえた。しかしフェルナは双翼を盾に使い光球から身を守った。そこで罪罰龍に一瞬のスキが生まれた。
そのスキを見逃すフェルナではなかった。その一瞬で罪罰龍の額に剣をさした。剣は光を放ち、罪罰龍を封印しようとしたが、額に傷が付いただけで封印はされなかった。
「おい、無理だったぞ」
「どうしよう・・・・・もう打つ手が・・・」
フェルナは自分の全ての魔力を剣に集中させた。
「あなた一体何をしているの！？」

「すこし黙っててくれ」
剣が炎を纏って紅き剣はさらに紅くしていった。罪罰龍はフェルナに光球をフェルナに撃った。しかしフェルナはよけず、ただじっと剣に魔力を溜めた。その身体からは大量の血が溢れていた。
「あなたこのままじゃ死んじゃうわよ！？」
紅い剣は焦った声で言ったがフェルナはただじっと魔力を溜め続けた。
そこで紅い剣に異変が起きた。紅い剣が自ら炎を出していた。その炎はフェルナの魔力（ほのお）と交じり合い、より強大な炎になった。
（なにこれ・・・何か懐かしい感じだ）
そこで紅い剣は思い出した。自分がまだ人間であった頃に封印した剣の名を・・・。
「火炎の剣（インフェルノソード）発動」
名を思い出したことで紅い剣は完全に炎を宿す剣となった。
「よしいける！！」
フェルナは強大な炎を纏った剣を罪罰龍に振り下ろした。罪罰龍はその『断罪』ともよべる攻撃を受け、燃えながら苦しみ、そして倒れた。
フェルナは罪罰龍が倒れたのを確認するとその場に倒れた。
「ちょっと大丈夫！？」
「全魔力を解放したからな・・・もう・・・死ぬかもな」
フェルナはそう言い、目を閉じようとしたとき
「そうだ・・・お前の名前を聞いてなかったな・・・・」
と言った。
「私の名前は、紅月よ」
「そうか・・良い・・・・名前だ・・な・・・」
そこでフェルナは目を閉じた。紅月は１００年ぶりに人間に戻った。
「あなたの魔力を回復させる。代わりにここ数日の記憶を貰うわよ」
そういって紅月は魔法陣を展開し、フェルナの魔力を回復させた。
魔法陣が消えた瞬間、フェルナは身じろぎした。紅月は慌てて剣に

戻った。
数秒後、フェルナは目を覚ました。がフェルナはなぜかここ数日の記憶を失っていることに気づき、自分が見知らぬ剣を持っているにも気づき、ここでの用事は終わったのだと分かり、この破壊された遺跡のような場所から出て、また復讐の旅を始めた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1655z/

神々の黄昏

2011年12月11日23時01分発行